

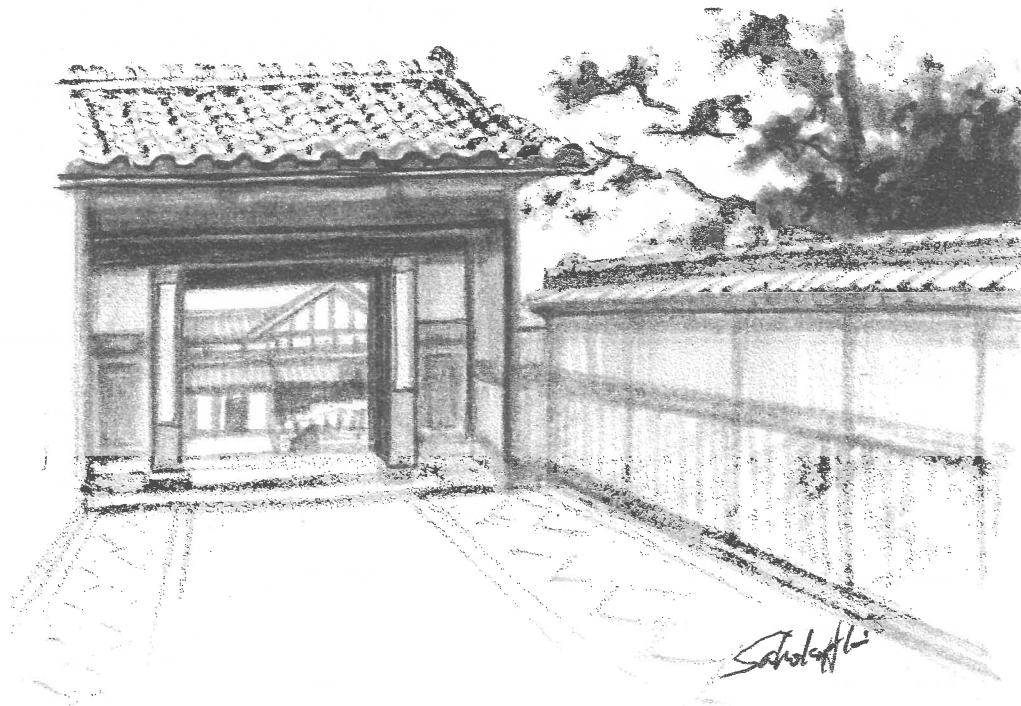
身近な自然環境・歴史的文化的環境・生活環境を保全・回復・創成する

NPO 法人すいた市民環境会議

2008年12月 第60号

# 吹田の郷

発行/NPO 法人すいた市民環境会議 会長/小田忠文 ホームページ<http://www3.big.or.jp/~sskk/sskk.htm> 設立/1997年3月15日  
事務局/〒564-0062 大阪府吹田市垂水町3丁目8-28-106 中村小夜子 TEL/090-8375-0647 FAX/06-6386-9491 編集/会報委員会  
年会費/正会員(個人・団体)1,000円、正会員(法人)10,000円、購読会員1,000円、賛助会員10,000円 郵便振込口座番号/00980-3-28845



## 目次

1. 表紙
2. 会長コラム 表紙の古民家
3. 地域学サミット in 熊野新宮
4. 大木冊子編集&大木調査感想
5. 鎮守の森は、今...
6. 椿の本陣、茨木市内探訪と交流
7. メーシアター発 アート・彫刻探訪
8. アズキ火山灰層&トンネルアート
9. 吹田くわいネットワーク会合と学習会
10. 花とみどりのフェア/会報委員会より

会長 小田忠文

住民と学識経験者の立場から淀川水系のダム計画を通して新たな時代の河川整備を考える「川の全国シンポジウム 淀川からの発信」が11月2日から2日間、京都大学で開催され延べ1400名が参加した。▲その会場で京都府の山田知事は「治水の判断は上中下流で立場が異なるが、いかなる結論を出してもその責任から逃げない覚悟」と述べ、滋賀、京都、大阪、三重の四府県の知事意見が地方分権の試金石になるとの考えを示した。またダムへの賛否は避けたが、「かつての『前へ進め』だけの行政は対立を生む。いったん決めた事業を見直し、引き返せるルール作りが必要」と公共事業のあり方についても指摘した。▲このシンポジウム後の11日、大津市の大戸川（だいどがわ）ダムなど淀川水系の4ダム建設を記した国の河川整備計画案をめぐる、四府県知事は共同意見を表明し、大戸川ダムについては河川整備計画に「位置付ける必要はない」と、事実上の「建設中止」を求めた。▲この四府県の知事の判断に大きな影響を与えたのは、淀川水系流域委員会の地道な活動であった。淀川水系流域委員会とは平成9年の河川法改正に伴い、淀川水系の「河川整備計画」について学識経験者の意見を聴く場として、平成13年2月に近畿地方整備局によって設置されたもの。▲『国が決めた施策だから、従え』の時代ではなくなってきてい

る。地方分権が叫ばれ、上から下への行政施策だけでは硬直したものになり市民の要求に応えきれなくなっているのが現状だ。▲私たちすいた市民環境会議は吹田市の環境施策に対して、市民活動で問題点を指摘し、市の担当部局と話し合いや交渉を重ねてきた。そして、徐々にではあるが、いろんな問題で前進してきている。▲川の問題では、茨木市に予定されている安威川ダム建設について吹田市は、今のところ推進の立場で事業の後押しをしている。しかし、その決定に市民や学者の意見がどの程度反映されたのか判然としない。基本に立ち返り、本当に必要なダムなのか、ダム以外の治水対策は存在しないのかなど、市民が理解し納得できるように話し合える舞台を作れないものだろうか。

「川の全国シンポジウム 淀川からの発信」は以下の京都宣言を採択しました。

▲淀川は川ではなく水路になっています 琵琶湖はもはや死に瀕しています 淀川と琵琶湖のいのち 生命が危ういのです ▲川に育まれる生き物たちのいのち 生命が危ういのです 私たちのいのち 生命が危ういのです ▲この状況は 全国の川や湖でも同じです このような川と湖を子や孫に引き継ぐことはできません これまでの「川づくり」を根本的に変えなければなりません ▲もう行政にだけ任せてはいけません 任せてきた結果が現状なのでから ▲私たちは 川や湖を傷めつけてきた責任を痛感し 一人一人が考え方や生き方を変えることによって 川と湖の再生に取り組みます

2008年11月3日

<表紙の絵>

吹田の古民家シリーズ(2)

旧西尾家住宅(吹田文化創造交流館)

西尾家は江戸時代から上皇の御料地\*の管理を務める庄屋で、明治以降も大地主として、経済的にも文化的にも旧吹田村のリーダー役を担った旧家でした。

屋敷は、吹田では最大級の1400坪の敷地に、明治28年に建て替えられた250坪の主屋を含め延べ450坪にも及ぶ建物があります。

現在は、国の所有となり、市の管理のもとで公開されて、ほぼ通年見学ができます。絵にあるのは道路から7mのアプローチをもつ門で、奥に見えるのは主屋の一部です。

(表紙画：安芸早穂子 文：岡村昇二)

\*御料地：天皇・上皇の所有地を御料地といい、旗本などの領地と区別しています。

## 「地域学サミット in 熊野新宮 Stage 2」で エコライフへの行動を公表

11月8日(土)・9日(日)、和歌山県新宮市の新宮地域職業訓練センターで『地域学サミット in 熊野新宮 Stage 2』(主催 新宮市・新宮市教育委員会 共催 国際熊野学会)があり、全国から公募した13団体より選ばれた6団体のひとつとして、環境会議(生活環境委員会)が事例発表しました。

サミットのテーマは「幸せの実感をつかむ・・・持続可能な社会づくり」。環境会議は、「エコライフへの行動(生活



発表は小田信子理事。左は総ごみ量を25%削減した熊野環境会議。

様式を問う)」のコーナー

で「エコライフはみどりのカーテンから」と題して発表しました。昨年からは開始した家庭での「みどりのカーテン」の取組みが、ヒートアイランド緩和だけでなく、心に潤いをもたらし、ゴーヤの収穫やエコクッキングによって楽しみも得ていることを伝えました。

サミットでは、地域に密着して農業や地域活性化に取り組む学生NPOや研究者、観光振興に取り組む研究者、団体の発表が相次ぎ、「地域でまず自らが動く」ということで一致しました。



会場には地域を熱く語る人々約100人が集まりました。

### サミットの講演で心に残った言葉



新宮市の木 ナギ

#### 和歌山県自然環境研究会会長・天神崎の自然を大切にする会理事の玉井済夫さんのことば

「黒蔵谷の下流にはアマゴがいる。何を食べているかを調べたら空から降ってくる虫を食べていた。アマゴは単に水に棲んでいるのではなく、山に棲んでいるのだ。この山の天然杉が機械の発達によって伐採され、それが土を崩壊させ、谷を埋め、水をなくし、アマゴの生息地を奪っている。」

「自然を守ることと、人間が生きるために自然を壊すことをどう調和させるか。これを考える時に私はいつも南方熊楠を思い出す。まだ自然が豊かだった時代に、熊楠はたった一人で国や県に立ち向かった。熊楠の訴えた内容を私たちは引き継ぐべきだ。」

#### 長野大学環境ツーリズム学部教授・大野晃さんのことば(「限界集落」という言葉の生みの親)

「65歳以上が50%以上を占めるのが限界集落。限界集落50%以上の限界自治体が急速に増えているが、小泉内閣の三位一体改革で地方交付税が削減され、社会的サービスが低下したためだ。また平成の大合併によって、本庁のある集落と支所になった集落の間に格差を作っている。」

限界集落が増え3つの問題を引き起こした。①伝統芸能・伝統文化の喪失。故郷への誇りの喪失になる。②山村の原風景の喪失。広葉樹林がなくなりスギ一色の常緑樹林に→輸入材が増えて林業が赤字に→放置林化した人工林→大雨で表土が流出→海の赤土汚染→磯枯れ→漁業への大打撃、そして③自然の生態系の喪失。

再生のためには行政が手だてを講じるべきだが、集落の人が自ら行動することが大切だ。また、山村の人の生活は自分たちの問題という認識を持つことによって物心両面での支援が始まる。

特に森林の荒廃は深刻で、いまこそ保全を真剣に考えないと日本は大変な状況になってくる。人間と自然が共に豊かになるような地域社会、自治体をどう実現していくのか、複眼的視点が必要だ。」

南紀州新聞(11月11日)でも大きく取り上げられました。



# 大木冊子編集&大木調査の感想②

生きもの委員会 平(ひら)軍二

## 1. 大木冊子の編集

### (1) 大木を見ながらの散策コース

大木冊子には大木の多い19ヶ所をマップで表示し、大木を見て廻る散策コースを設定する予定です。9月～10月には、19コースすべてを8回に分け関係者で歩き、コース通り歩けるかどうかを確認しました。コース案内通り大木を見ながら歩く人が、分岐点で左右どちらに行くべきか良くわかるように、信号やバス停などの目印をつけて、分かりやすいマップにすべく検討中です。

### (2) 安芸さんの大木冊子表紙絵

前号でお知らせの通り、イラストレーターの安芸早穂子さんに、カラー版の大木冊子用表紙絵を描いていただきました。



表紙絵 泉殿宮のクスノキ

### (3) 吹田の大木図鑑

吹田市内で観察された大木の樹種は36種あります。樹種すべてがわかる大木図鑑を後半部に編入する予定で、塩田敏治さんが樹形を示すイラストを作成中です。一例として、ケヤキを示します。

## 2. 大木調査に参加して

新芦屋上 美濃部 剛

よい経験をさせて頂いたというのが作業を終わっての感想です。

はじめは、全体の構想も何も知らないまま「人手不足のようだから、まあ出来るだけお手伝いしてみようか」という軽い気持ちでした。

私は元から街並みを見て歩くのは好きであったので、あちこち知らない場所へ行けるのは楽しいことでした。大きな木を探して坂を登って行って、その場所にたどりつき、木とその周りの風景をみて「ああ、ここにいたのですか」という感じでした。普通なら行くことの出来ない工場や個人のお宅に入れていただけたことも、よい経験でした。

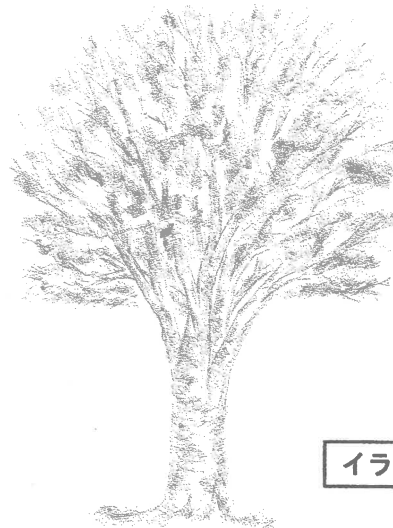
結果的には、吹田市の大木がどこにあるか体感的にわかった感じです。

参加していくうちに、だんだんと個人的に好きな木が出来てきました。それは人間に近い場所にある、公開されている木です。例えば、神社の木で、若いお母さん方が、子供達と遊んでいるような場所です。その木は人と親しく交わっています。

又、神木になっていて、注連縄(しめなわ)がはってあったり、木の根元に祠があったりすると人間との結びつきを感じてよいものでした。

木はどう思っているか分かりませんが、公園にある木でも、配置をよく考えて、人間との適切な関係を持つことが大切だと思います。今回の調査は平さんがおられなければ出来なかったのではない

かと思います。予備調査から始まって、数回の下見、後の見直しと、同じ場所に何回も行かれたものと思います。調査日に頂く地図があまりにも詳細であり、びっくりすることが度々でした。



イラスト事例 ケヤキ

# 「鎮守の森は、今...」

生きもの委員会 平(ひら) 軍二

『鎮守の森は、今』 10月31日(金)から1週間、吹田ケーブルテレビでこのような特集番組が放映されました。吹田市環境部地球環境課の依頼で、吹田市広報課と吹田ケーブルテレビの取材に協力し、現地を案内しました。

すいた市民環境会議は2002年に社叢(しゃそう)学会より吹田市内の神社20社の鎮守の森調査を受託しました。その結果が吹田市(担当 環境部地球環境課)から冊子「鎮守の森は、今...」として発行されています。

今回の放映を機会に皆様にも、吹田市に残る「鎮守の森」を知っていただきたく紹介します。

## 1. 2002年の調査

吹田の郷28号(03年2月)で「鎮守の森調査について」と題して報告しています。ここでは要点のみ紹介します。

生きもの委員会中心に調査チームを編成し、2002年11月から2003年1月に鎮守の森の現地調査と聞き取り調査をおこないました。調査内容は、植生・景観・空間形成・歴史的経過・神事や祭事・運営や地域のかかわりと多方面にわたっています。

当会の調査をもとに、下記名で冊子が発行されました。内容は冊子で確認下さい。

編集：社団法人 日本公園緑地協会

NPO法人 社叢学会

発行：吹田市(担当 環境部環境室地球環境課)

平成15年(2003年)3月

☆冊子は現在も地球環境課で希望者に配布しています。

社叢学会：社叢(神社の森)を対象に植物学・生態学・建築学・文化人類学など研究分野の垣根を取り払って調査研究を進め、地域に密着した新しい学問の創造と社叢の保存を目指して、2002年5月に設立されたNPO法人。

## 2. 今回の吹田の鎮守の森取材協力

10月22日、広報課職員、吹田ケーブルテレビの担当者として下見に行きました。遠景・近景で鎮守の森が良くわかるという視点から、次の4社を案内しました。

- ①佐井寺伊射奈岐神社(佐井寺1丁目)
- ②垂水神社(垂水町1丁目)
- ③春日神社(春日3丁目)
- ④片山愛宕社(朝日が丘町)



垂水神社鎮守の森

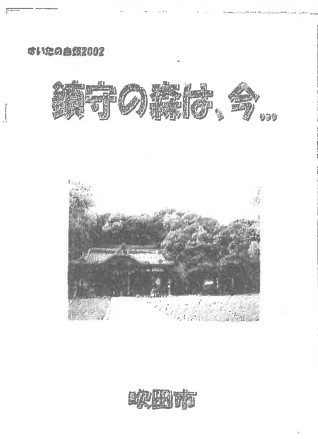
写真は2002年5月撮影のもので、今回も垂水神社の鎮守の森の広さが吹田一であることを実感しました。



片山愛宕神社

片山愛宕神社は入り口がわかりにくく、人に知られていない緑陰です。

12月14日(日)浜屋敷まち案内人主催の愛宕4社巡りがあります。詳しくは市報すいた12月1日号参照下さい。



### 目次

1 鎮守の森の分布.....	1
2 明治18年(1885年)の鎮守の森の状況.....	2
3 空から見た鎮守の森(2002年).....	3
4 鎮守の森の立地状況・形成状況.....	4
5 鎮守の森の状況.....	5
こんもりとした森が形成されている.....	5
森とまでは言えない(樹木が群生).....	7
その他の森(森の形成はとぼしい).....	9
鎮守の森の所在地.....	11
6 ヒートアイランド現象におけるクール スポットとして鎮守の森.....	12
【コラム】 鎮守の森と住民との関わり.....	8
吹田市の愛宕社.....	11



# 「椿の本陣」見学・茨木市内探訪と交流会

2008年10月4日(土) まちなみ委員会 岡村昇二

まちなみ委員を中心に浜屋敷のまち案内人など11名が参加し、まちなみ委員研修会として茨木市を訪問、午前中は西国街道の史跡・郡山宿本陣(通称 椿の本陣)、午後は茨木市の観光ボランティアとの交流会と観光ボランティアの案内で中心部のまちなみと川端康成文学館を見学しました。

## 1. 「椿の本陣」見学

西国街道の郡山宿本陣は、御成門の脇に名物の「五色の椿」があったので「椿の本陣」と呼ばれるようになったそうです。建物は、旧街道に面して、ここだけ道幅も広く、瓦葺き・格子戸のある大きな間口の構えは周囲を圧倒する雰囲気があります。

座敷に上がり、当主の梶氏から宿帳や大名が宿泊中であることを表す「関札」などを示しながら本陣の歴史の詳細な説明を受けました。

建物内部には、「上段の間」や「湯殿」など高貴な方の宿泊に備えた独特の設備が興味を引きました。裏庭に回ると、茶室、蔵、問屋営業の部分など間口だけでなく、奥行きも深い大きな屋敷でした。建築時期は江戸後期とかで、宿場の歴史に比べ新しいのですが、二百数十年の歴史の深みは十分

感じられる建物であり、備品、調度、資料の数々が残されています。



当主・梶さんから説明を聞く

椿の本陣前で記念撮影



## 2. 観光協会・観光ボランティアとの交流

午後一番に、市内中心部にある茨木神社の会館で、茨木市観光協会の職員の方々と観光ボランティアガイドの皆さんとの交流会を持ちました。最初に神官から神社とまちの歴史を聞き、その後に双方のまち歩きガイドやまちづくりの活動について話し合いました。

茨木市の観光ボランティアは、観光協会が組織し、昨年度から研修を始め、今年度初めより市民対象の市内散策会を開催し、研修の終わったガイドが案内しているとのことでした。秋の部は9月から月1回の行事を実施の予定です。浜屋敷の「吹田まち案内人」が行っているような、団体からの依頼に基づいてガイドをする事はもう少し先になるようです。

## 3. 観光ボランティアの案内で古いまちなみ探訪

(交流会が終わってから、観光ボランティアガイドの案内で、)茨木市街中心の古い街並みを廻りました。江戸時代の初めに取り壊された茨木城の痕跡や江戸、明治期に建てられた古い商家群を巡り、市内唯一酒造家・中尾商店で地酒もいただきました。



茨木神社



古き良き時代を偲ばせる中尾商店前

## 4. 川端康成文学館見学

茨木市と川端康成の関係は、康成が茨木市宿久庄の祖父の家で育ち、祖父の死後は大阪市豊里の叔父の家から吹田駅まで歩き茨木中学に汽車通学したことにあります。館内で康成の作品、遺品を見て、「川端通(つう)」になったつもりで館を出ました。

文学館の前の道は「川端通り」。元茨木川で、現在は市内を縦断する車道と桜を主に多くの樹木が植えられた緑地です。全長5kmあるそうで、市民の良い散策道となっています。

# 阪急吹田・片山・佐井寺南界隈のアート・彫刻探訪

2008年11月1日(土) まちなみ委員会 古谷啓伸・松岡要三

視点を変えて町を歩くと、いろいろなものが見えてきます。今回はアートや彫刻を求めて、メイシアターから佐井寺南公園まで歩きました。出会った作品を紹介します。

メイシアターにはいろいろな作品があります。1階吹き抜けの天井と2階ロビーを飾る造形作家・新宮晋の作品「空のイメージ」は良く知られています。

3階には、千里山在住の日本画家・村居正之の「陽光」と紙絵作家・松久節子の「花の囁き(ささやき)」。

2階には、世界でもめずらしい鋼板砵瑯(ほうろう)画家・田中守の「Work-31」、イラストレーター・黒田征太郎のライブアート「五物遊撃(オムルノリ)」、日本画家・満田天民の「滝」があります。

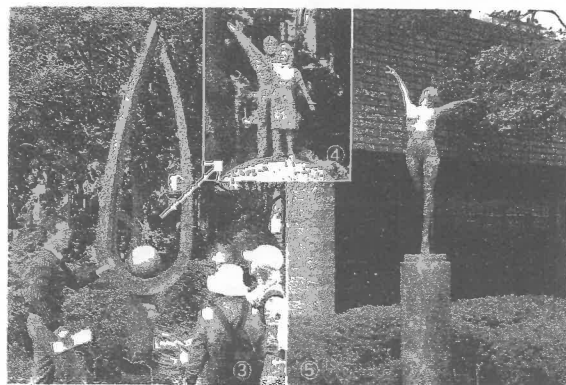
2階レストランの屋外には、彫刻家・児玉康兵の「友情のかけ橋」があります。

黒田征太郎の作品は韓国の伝統芸能集団とのジョイント公演したとき描いたライブアートで、そのほかの作品もメイシアターや吹田市と関係のある作家が寄贈したものが多ようです。また、1階入り口の壁にカナダ政府寄贈の「イヌイットの像」が埋め込まれています。これは、大阪万博のとき展示されたものです。(左図)



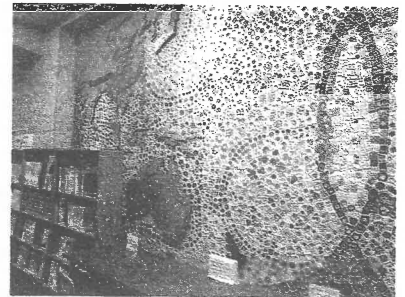
これは、大阪万博のとき展示されたものです。(左図)

メイシアターの前に広がるいずみの園公園に2つのモニュメントが建っています。「非核平和都市宣言モニュメント」は、手のひらを表すU字形の中に地球が置かれ、その上に立つ男女が手を上げて平和を呼びかけています。「健康づくり都市宣言モニュメント」は躍動感がすばらしい女性で、私(古谷)は全身で真似を何回も繰り返しました。



非核平和都市宣言記念モニュメント  
健康づくり都市宣言モニュメント

中央図書館にも大阪万博の遺産があります。図書館前の屋外に「ステンレスパイプのレリーフ」、図書館1階子供室に「タイルモザイクの壁~南太平洋~」があります。(右図) いずれもニュージーランド政府からの寄贈されたものです。

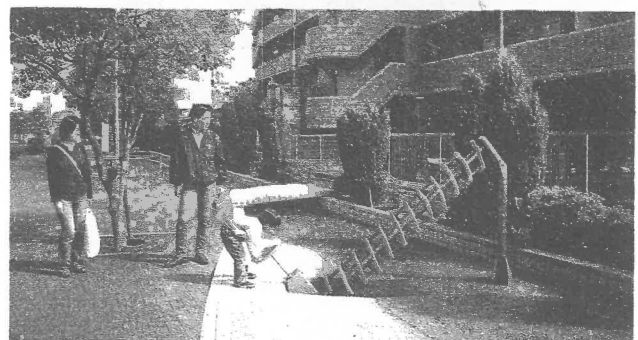
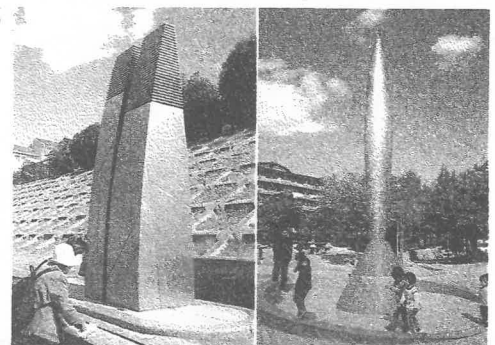


片山公園の「平和と健康の鐘」を見て北上、JR社員研修センター、吹田市老人保健施設を経て片山坂へ。

上山手町から北西に伸びる片山坂と佐井寺南が丘公園、せせらぎの道は1990年代に佐井寺南地区整備事業で整備されましたが、北海道在住の女性彫刻家・平田まどかの作品が点在しています。片山坂に「垂水の滝」「吹田の渡」「田舟」「吹田くわい」「年貢米」、公園に「OMPHALOS」があります。「OMPHALOS」はラテン語で「中心・ヘソ」を意味します。佐井寺南が丘公園が吹田市の中心に位置することから、このようなモニュメントが設置されました。

垂水の滝  
(左図)

OMPHALOS  
(右図)



せせらぎの道には、こんな楽しそうな「らせん状のポンプ」(上図)に出会いました。

## 90 万年前の自然遺産 「アズキ火山灰層」 高さ 3.5m×幅 40m の大壁画 「トンネルアート」

まちなみ委員・現代美術を楽しもう塾 松岡要三

2001 年に制作した吹田市観光マップ「あろっく吹田」の風景も 7 年が経過し、かなり変わりました。そのような中で今年 4 月に発行された 2008 年版では、吹田市民の熱い想いで作り上げた活動成果で、より多くの市民に知っていただきたいものを追加しました。

一つは旧山田村コースにある万博外周道路沿い竹やぶの斜面に露出している貴重な自然遺産『アズキ火山灰層』です。もう一つは吉志部コースで紹介している吹田市立博物館前の名神高速道路下のトンネルに描いた巨大な壁画『トンネルアート』です。

暑い今年の 8 月、これらに係わった団体が、市民に披露するためイベントもありました。

### 自然遺産「アズキ火山灰層」

アズキ火山灰層は約 90 万年前に大分県の湯布院近くの猪牟田(しむた)カルデラの噴火による火山灰が積もって出来たものです。この地層を発見したのは 1949 年、のちの大阪市立大学名誉教授・市原実さん。「カギ層」と呼ばれる地質学上重要な地層です。開発が進み、この露頭が千里丘陵で地層が見やすい唯一の場所となったので、貴重な「自然遺産」として残そうと吹田地学会のメンバーが働きかけ、万博記念機構の協力で露頭保存と説明板の設置にこぎつけたものです。

8 月 9 日には名前の由来となった「アズキアイヌ」を食べながら、観察会が吹田地学会主催で開催されました。(写真は観察会風景と表示板)



### 子どもたちとアーティストが描いた 大壁画「トンネルアート」

五月が丘から博物館へ行く名神高速道路をくぐるトンネルは、かつては落書きも絶えず殺風景なトンネルでした。2006 年の千里ニュータウン展のイベントとして、両側の入口面に絵を描きました。その後現代美術を楽しもう塾が国の「子ども夢基金」の助成を受けて、2007 年夏は京都側壁面、2008 年夏は大阪側壁面を、主に子供たちと若手アーティストが描き、大壁画を完成させました。

「21 世紀の夢」をテーマに原画を公募、採択された原画をもとにアーティストと公募した参加者、地域の子どもたちから大人までアートを通じて交流を計りながら制作したものです。

壁面の洗浄では地域の高齢者クラブや大学生、中学生の支援、通るたびに声をかけ励ます方々、そのほか各方面の支援や寄付もありました。

8 月 31 日には約 100 名が集まり完成式と祝賀パーティーが行われました。博物館へ行く方々、紫金山公園を散歩する市民には大変好評です。



制作風景

注記) よく似た地層にピンク火山灰層があり、吹田市立博物館前名神道路の側面や千里北公園の尾根近くで観察できます。これは猪牟田カルデラで約 100 万年前に起こった巨大噴火によるものです。



# 第10回 吹田くわいネットワーク会合と学習会

学習研修委員会 高島耕一郎

10月4日(土)に男女共同参画センター(デュオ)で吹田くわいネットワークの会合と学習会がありました。今回は元京都大学教授の阪本寧男(さだお)先生に「半栽培植物と吹田くわい〜植物と人間の共生関係の成立過程(植物のドメスティケーション)〜」という講義をしていただきました。(ドメスティケーションとは栽培化という意味です)

参加者25名で、その中に府立園芸高校の谷本先生、神戸大学農学部伊藤幸教授など専門家も見え、ちょっとした学会の雰囲気でした。吹田クワイ保存会の北村会長の挨拶の後、レジメと資料に沿った形で、阪本先生の大学講義のようなお話が進みました。

## 1. ご講義の内容

現在は、ほとんどの食物が栽培化あるいは家畜化されたものを食料にしている。祖先野生植物オモダカが栽培植物クワイになる途中に半栽培植物としてスイタクワイがあるとの位置づけを説明されました。

(1)ドメスティケーションの過程は、植物とそれを利用する人間との間に成立した共生関係の発展過程として把握できる。

(2)極めて長期間続いた採集・狩猟生活の中で、人間の生活活動による環境攪乱に適応した植物群が群生するようになり、それを利用する過程で、半栽培の段階が出てきた。

- (3)その中の有用なものから人間は栽培植物を創り出し、農耕を始めた。
- (4)この過程の中で人間は栽培植物に依存する度合の高い生活様式(農耕)をとるようになった。

その結果、スイタクワイをめぐる人間の働きかけ(文化)として、次の8点にまとめておられました。(阪本・1995)

1. 高湿田の雑草であったが、除草の際残しておく。栽培はしていなかった。
2. 稲刈りのあと誰でも掘ることができた。
3. 収穫用の“クワイ掘り”と“桶沓”があった。
4. 年末に“鴨”という藁づとに入れて贈った。
5. 高浜橋のたもとにスイタクワイを売る店があった。
6. 正月の祝膳や京都では雛祭りに甘煮して供えた。
7. 京都御所に献上するための献上籠があった。
8. 明治時代には約10石(1800リットル)の収穫量があった。

## 2. 質疑応答(Q&A)や報告

Q1:スイタクワイは、なぜ、栽培植物とならなかったのか?

A:吹田地区に生産が限られていたこと。

Q2:オモダカは苦くて、どんな料理法でも食べることはできない。それに比べるとスイタクワイは苦みがない。人の選択で苦みがないものがつくられたのではなく、元々、苦みがなかった種類ではないのか?

A:そうとは言えない。

報告1:スイタクワイの交配をしているが大きさに変異はない。オモダカとスイタクワイの掛け合わせをしたが、連続性がなく、スイタクワイは常に大きいものができる。ふしぎである。

Q3:スイタクワイの栽培化を続けると、品種改良が起こり、別の形質を持つようにならないか?

A:量産されると全く別のものになる可能性がある。

報告2:土壌成分によって、スイタクワイの表面の色が変わることがあるのか?栽培して変化したものとうでないものがあらわれた。



阪本先生



熱心に聞き入る参加者

## 3. 印象深かったこと

スイタクワイを半栽培植物の例として注目し、研究対象とされたこと。

スイタクワイ採集の話し、また、吹田の農家で誰が採集してもよい状態で植えられていたが、専門の掘る道具などの文化があったことに驚かれたこと。

さらに、木下ミチさん、金馬ヨシエさんとの出会いなどを正確に覚えておられ、その話しを聞くことができたこと。

阪本先生はとてもお元気で、受講生が圧倒されるぐらいでした。おかげでスイタクワイのことをたくさん学ぶことができました。

吹田くわいネットワークは、すいた市民環境会議が吹田くわい講座を2006年末に連続して3回開催したことをきっかけに、受講生が中心になって作った組織です。

# 花とみどりのフェア

事務局 中村小夜子



第 84 回花と緑のフェアが 10 月 25 日(土)26 日(日)に江坂公園で開催されました。

すいた市民環境会議はブースを出し、大木調査を広報しました。大木マップとともに野草調査のマップも展示して、立ち寄る人と話しがはずみました。

二日目は朝からあいにくの雨、一日中小雨が降り続きました。無料配布や大幅安値販売の実利コーナー、おもちゃ作りや木を切る子供向け体験コーナーなどは人が集まったもののそれ以外のブースは素通りで閑古鳥が鳴いていました。

## <お詫び>

- ・前号の記事、井戸啓司さんの「素晴らしき哉、みどりのカーテン」(5頁)本文下から7行目の文字が写真とダブって読めませんでした。井戸啓司さん、読者の皆様にお詫び申し上げます。
- ・正しくは、「来年はベランダ全面をゴーヤ、朝顔、ヘチマのカーテンで覆う構想を今から検討しております。」(アンダーラインの部分が隠れていました。)

## <会報委員会から>

### 1. 今年を振り返って

- ・各委員会の活動を出来るだけ忠実に漏れなく会員の皆様にお届けすることを目標に、各委員会よりの報告を中心に編集しました。みどりのカーテン・エコッキング、大木調査、まちなみ散策など活発な活動をお伝えしました。反面、会員の方の投稿記事が少なく、この面では少し物足らなさを感じたのではないのでしょうか。

### 2. 会報の制作は、今...

- ・各号の制作は下記のステップを経て制作しています。

- ①企画会議：記事予定内容の選定
- ②理事会：原稿の依頼、予定案の承認。
- ③編集会議：レイアウト設定、原稿内容検討、記事作成。
- ④理事会：記事の確認チェック・承認
- ⑤校正会議：記事の最終チェック
- ⑥印刷・封入・発送作業

- ・会報の制作は企画から発送まで、下記委員で 2007 年 5 月号よりおこなっています。封入作業は多くの会員に手伝っていただいています。

会報委員：田中一子、山本富雄、古谷啓伸、松岡要三、佐藤和子(写真左より)



編集会議に集まったメンバー 亥の子谷コミセンにて

### 3. 次年度に向けてお願い

- ・当会の活動だけでなく、環境やまちづくりに関して開催された市内のイベントで、会員の皆様に知っていただきたいニュースを掲載したいと思います。そして、会員の想いが飛び交う活発な意見交換の場となる会報にしたい。会員の皆様の投稿を期待しています。
- ・会報制作に参加しませんか。会報委員を募集しています。

連絡先：佐藤和子 (TEL/FAX 06-6387-2096)